
不慮の再会

Jan Ford

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

不慮の再会

【コード】

N0664D

【作者名】

Jan Ford

【あらすじ】

夜道の中人知れず再開する二人の男。一人は追いかけ、一人は逃げる。それは、あまりにも空しい出会いだった。

「誰か！」

息が切れる。走りっぱなしで、鼻のまわりをさすような痛みが覆っている。もうだめだ。これ以上は走れない。

せまい通りの中で、後ろから一組の足音が執拗に宗谷そいを追いかけってくる。辺りは真っ暗で、足元さえもよく見えない。

「誰か……」

声がかすれた。どうして誰も俺を助けてくれないんだ。ここにも、そこにも、家は通り一面に立ち並んでいるというのに！部屋から出てきてくれさえすればいいんだ！

つま先が何かに当たったのに気づいた次の瞬間、宗谷は転んで、コンクリートの上に体を打ちつけていた。両手のひじと掌がすりむいた。

直後、宗谷の首筋を冷たい手がガツとつかみ、そのまま顔を地面に叩きつける。意識がとんだ。上下が分からなくなる。

「宗谷……久しぶりだな……」

ひどく息が上がっていて、声をだすのも苦しかったが、古泉こいずみは構わずに宗谷の体の上へのしかかった。

「古泉部長……」

「自分が何をしたか、覚えてるんだろうな……」

首を押さえつけている腕に、さらに力を込める。宗谷の口から呻き声が漏れた。古泉は口をほころばせて軽く笑みを浮かべ、復讐の甘美な感慨を存分に味わった。

「結構痛かったんだぜ。なんせ電柱にぶつけられたんだからな。なあ、お前は どうして上司を見捨てて逃げ帰ったりしたんだ？おい、答えてみるよ！見てみるこの傷を！頭にひびが入ったじゃねえか！」

古泉はそう言って、震える宗谷の目の前に、髪を掻き分けた自分の側頭部をグイッと近づけて見せた。髪の間から生々しい針の縫い

あとがのぞいていて、そのまわりだけ髪の毛が削がれている。

「何？」

「すみません。本当にすみません。こんな……こんなことをするつもりはなかったんです。本当にすみません。許してください……」

宗谷の瞳から、大粒の涙がポロポロと流れ落ちる。とめどなくこぼれ出てくる鼻水が、あごを伝って地面に垂れた。古泉は無表情のまま宗谷のことを見下ろし、何もしないでじっと黙っていた。ひと気のない路地の真ん中で、二人の男がコンクリート舗装の上にじっとかたまっている。

やがて泣き声は消え、辺りに再び静寂が訪れた。

宗谷はそれでもまだ絶え絶えと、小さな嗚咽を漏らしていたが、それはもうほとんど聞き取れないほどの大きさだった。

「なあ、宗谷」

不意に、古泉はつぶやいた。声はどこか遠くの場所を向いていて、宗谷ではない他の誰かに向かって言われたかのように聞こえた。

「はい」

なき続けて力の抜けた喉から、宗谷は何とか力を振り絞って応えた。

「由香は、俺の葬式の時に泣いていたか？」

気持ちの読み取れない、淡々とした口調だった。大島由香は古泉部長の恋人だった人だ。30代にしてはじめて同棲したという相手で、古泉は職場にいてもことあるごとに彼女の話をしていた。

本当は知らないのに、「泣いていました」と答えた。そう言うしかなかった。

「そうか……」

古泉は何も言わない。ただぼんやりと、電灯の光を眺めている。

古泉部長、本当にあの日は、こんなことをしてしまうとは思ってなかったんです。いつものように会社を出て、いつものように居酒屋に向かって……。

あの日は部長と僕以外は都合がつかなくて、他の皆はついてこなかったんです。二人で寂しく、それでいても互いにどこか気があって、話もまあまあ盛り上がりましたね。何を話していたんですっけ？僕はもう忘れてしまいました。だって、何を争って喧嘩したのかも覚えていないんですよ？

あの日は珍しく雪が降ってましたね。ちょうどドラマの中でも降ってきそうな、真っ白な雪ですよ。その上に。部長は倒れて、頭から流れた血が、白く積もった雪にじわりじわりと広がって行って……あの光景が僕の目に焼きついて、今も離れないんです。どうしたらいいんでしょう？教えてくれませんか？毎日毎日がつらくってしかたないんです。

「おまえ、今どんな生活してるんだよ」

唐突な問いかけに、宗谷はハツと気を取り直した。

「どんな……ですか。毎日、同じことの繰り返しですよ」

「楽しいか？」

「……いいえ」

つらいんです。毎日毎日がつらくてしかたない。

「そうか」

古泉はそういつて立ち上がった。体が一気に楽になる。古泉は名残惜しそうに夜空を見上げ、それから大きなため息をついた。

「もう行ってくれ。この近くにはもう二度と近よるなよ」

顔を上げると、もうそこに古泉の姿はなかった。かわりに夜空の中でうつそうとした雨雲が、月に被さって浮かんでいる。

宗谷は、ゆっくりと立ち上がった。そして、辺りを見回してから、再びいつもの場所へと歩き出した。ひと気のない夜の橋へ。自分の人生が、終わりを告げたところへ。

途中、深夜残業を終えた一人のサラリーマンが彼のすぐ脇を通り過ぎていったが、そのサラリーマンは何事もなかったかのように帰路をゆき、自分の脇を男が通っていったことなど全く気づいていなかった。

不慮の再会

毎日毎日が、つらくてしかたない。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0664d/>

不慮の再会

2009年3月24日08時58分発行